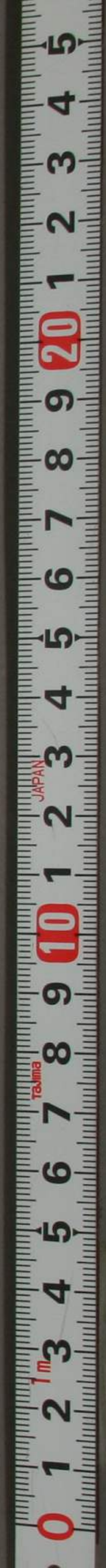
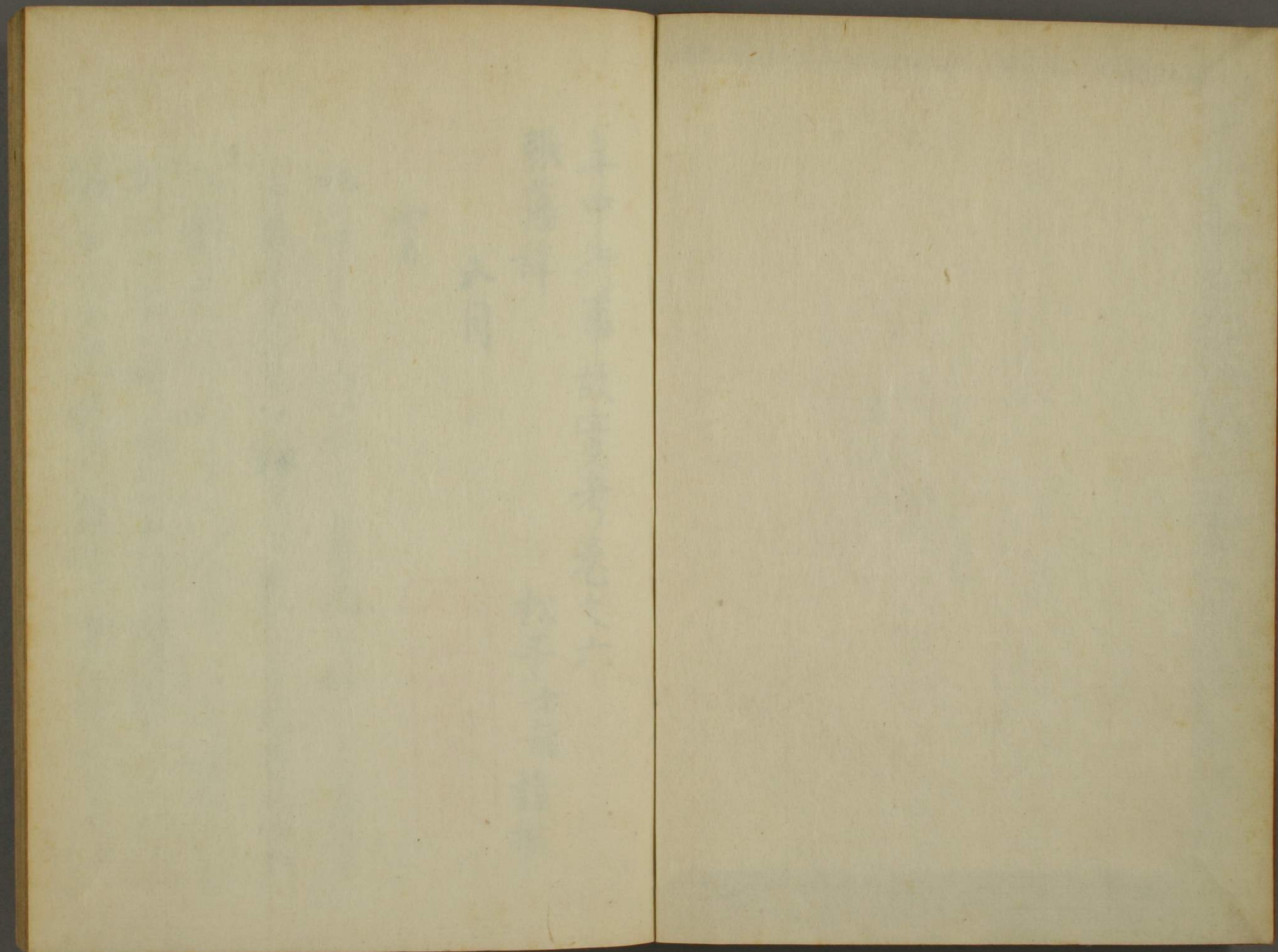


年中行事故實考

三

76
3083
3





76
3083
3

年中行事故實考卷之六

張藩稗

松平士龍謹撰

六月



去
水
五味均平蔵



松平中より御殿へ萬葉とゆへに
自叙家出也とゆへに由介と北中
のゆへに
百葉のゆへに
朝ふすすハ中真北又瓜の遺風
納言のゆへに野の長明ハ
中真のゆへに

古びたるの風信々 陸奥とて 草蒲あり
の 菰のまふまふ ぬ 西玉うてを 柵のまふ
草蒲のまふまふ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
意あり

建武年中行幸 岩田の月日 十六日 草蒲
とて 南殿の階のまふまふ ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

今 日 柵 ぬ 陸 奥 の ま ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
昔 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
右 甲 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

蒲の葉の... 中將... 実方の

本草綱目曰陶弘景曰五月五日取棟葉佩之云辟惡也

子日

陽年... 始... 午... の...

五雜俎曰古人午五二字想通用端始也
猶言初五耳

菖蒲のう

續日本紀曰天平十九年五月詔五日之

節非菖蒲縵者勿入宮中

菖蒲の輿

今も柵中少く東防城ありたる所
あり福なきものとの御殿よりしり
柵中の中り半時ほどしり

菖蒲のゆづ

柵中より新苑へ入りしりゆづのゆづめ
柵中半中の生果ありしり

菖蒲酒

此日まの根をゆづり陽氣を助
年と延びしりゆづの菖蒲
酒は後飲ましりゆづの菖蒲
ゆづの根をゆづりゆづの根をゆづ

月令廣義曰神農書午日以菖蒲或縵
或唇沃酒助陽氣延年以山澗九節者
佳す

謹案此説及しゆづの説と考しり
ゆづの根を石菖蒲なり田舎の用は

水苗苗にけす然してさみりて
ま久今改むる事

蘭湯

中興してハ草の香と湯を入浴
祝あつてもあつきの湯と浴する
か

大戴礼曰五日蓄蘭為沐浴

臯羹

中興漢の附名ゆの羹と百之揚

名ハハ考のさるゆあことたはせし
懲惡のやせしむ業をゆふ五日陰氣
始めしすさるゆを陰のる陰氣
しきとさすゆりまを熟と確く
ゆゆゆゆ

漢史曰五日作臯羹賜百官以其惡鳥故
以五日食之古者重臯羹蓋欲滅其類也

菹魚

中興昔者魚と食すそ又肉陰外陽れ

五月九日 月令彦

艾虎

中身よハ艾のまゝと積虎の形に似たり斬りて
赤人の形に似たりと艾人といふ我おも
よ〜〜が〜〜

新古今和歌集

三條院女院入左邊

三條院の所五日合 菖蒲の根を切らば
か〜ゆ〜ゆ〜梅の枝をす〜人のま〜
ゆ〜ゆ〜と題〜〜秋は〜〜

三條院女院

梅の枝を折らば〜ゆ〜ゆ〜
あ〜の〜あ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

貞原氏ゆふ歳時記曰歳時新記よ〜揚午
の日菖蒲艾と別〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ハ
割蘆の形に如〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
〜ゆ〜

新楚歳時記曰採艾為人懸門戸上以儼
毒と氣ヲ

粽 一名角黍

菰のこゑを餅とて煮て食ふは年々陰陽の色未分教せり象のこゑを中月ハ乾純陽の卦なり夏至自中より一陰初めく生然のこゑ陰氣陽とつゝの時ありて中兼くを屈原とて吊るは故事とて公羊 屈原を高辛氏の子と祀るは以附食の記也 法書に陰粽柏粽は風俗重なり中華

よハ菰或ハ苽の葉を糯と包み小豆胡椒をこくとまじへるは一戸隔る者熟しとて粽のこゑを五子の葉をこゑとて包む

歳華紀麗曰午日以菰葉裹粉米以象陰陽相包裹

月令廣義曰長沙歐回白曰見二閭大夫曰君常見祭甚善但所遺苦蛟龍所害今若百惠可以棟樹葉塞其上仍以五絲

絲縛之此二物蛟龍所憚也後世角黍併
帶五色絲及棟葉始此

茶玉

春はけしけし色々の花とゆらりとの糸とく
うさう香の玉と名習うけ形具と襪の
疫と除くといはれ古代杜中より典
茶玉といふは御座るる后宮へと
修殿よりまうく伊懐たてくる母命の初ふ
はまらぬ九月九日茶玉の代りふくく

くはくはけしけし市の中へ賣りぬ
あはれふしけ立又袖花よりまき二三
寸の形をゆきふしとぬぬぬぬぬぬぬ
らふし中真の長命候と一服お茶玉
くはくはけしけし市の中へ賣りぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
三代實録曰陽成天皇元慶七年五月五日
庚午賜親王公卿續命縛
之中氏培尾曰茶玉の方麻布一両沈香

一 取丁香五粒 甘草一兩 龍腦一分 麝香一分
和末の作り

又方 麝香一分 白檀二分 龍腦一分 蘇合香
一分 沈香一分 丁香一分 甘草一分 麝香一分
作り

くまもと一連ふ十二回月あつ年ふふ十二

茶玉呂

長命縷 一名續命絲

中義の作り

長命縷の作り

彩氣の作り

月令廣義曰 長命縷即五絲絲亦名續命
絲 北人午日以雜絲結合歡索纏于臂

風俗通曰五日賜五色續命絲俗說益人命云

長命縷也

端午神符

赤色の〜〜と心〇辟多符と云古也
~~~~~

東鑑建安五年五月四日辛巳今年端午  
良辰當于壬午必依可有御謹填御勘文

故諸陵顯賀茂特定撰一通并三種神符御護等自

仙洞密々被進是則黃帝秘術也  
去夜到來于女房中今朝内々進覽勘

文ナ云



女月百丙午壬午ニ當ル年賜午神符

ヲ作リテカクレハ命百年ヲ保ツ事

右本文云五月五日丙午壬午ニ當ル年

赤紙ヲモナテ神符ヲ作リテカクレハ

壽百歳也件ノ神符ト云ハ三徳ナリ

一ニハ辟兵符此符ヲカクレハ鉞矢ハ

難ヲカレ敵人ヲ亡ニ我身ニ向フモノハ

シツカラフニハ破敵符此符ヲ

懸レハ敵人アヘテ起ラヌトヘテ箭カ

兵我身ニ向フトイヘトモ害ナク皆悉ク

ク折ルニハ三台護身符此符ヲ

カクレハ三災九厄ノ病難ヲ除ク凡此

三種ノ神符ヲ造テカクレハ短命ノ者ハ

命百年ノハ敵人アルモノハ敵人ヲ亡シテ

我身恙ナク諸ノ厄難ニ逢タラシム人ハ

厄難ヲ消除シ禍殃ヲ除クコト此神符ハ

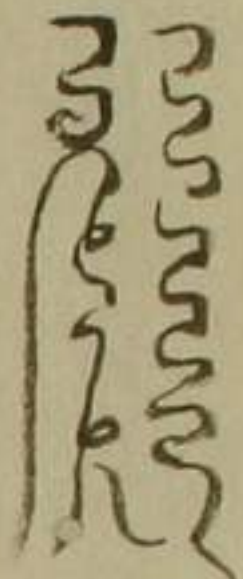
カニハシカシト故ニ先例皆此日ニ當ルコト

此等ノ符ヲ御マモリニ用テル今年五




月五日既壬午ニ當ル仍先例ニカセ公家  
行ハレ誠此符ヲカケサセ給ヒ百年ノ御  
壽命ヲタモセ給ヘシ仍注進如件


月令廣義曰

赤靈  抱朴子謂午日朱書赤靈

符着心前辟兵疫百病

辟兵神符  岫嶽神書五

月五日用丹砂雄黃等分研書符于絳  
帛或素帛上獨行萬里可辟虎狼盜  
賊凶鬼蛇毒

將師護身符  吉凡大將逐年五月五

日午時以生朱砂雄黃紙書符向日頂  
禮用天罡祖炁令雞犬婦人符縫衣服  
內照前後心佩帶鎗箭不傷至來年  
五日再換



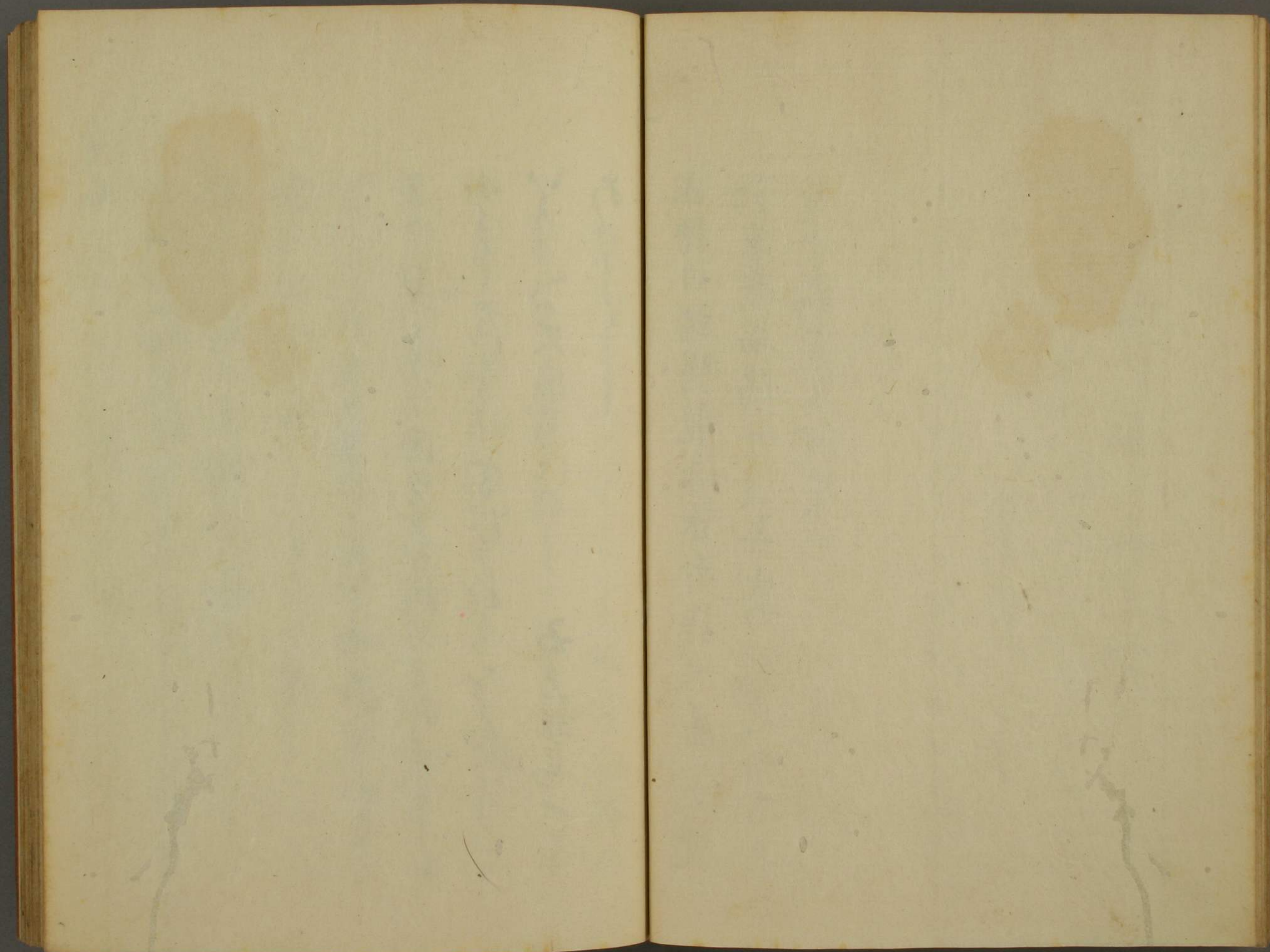
競渡

中華海邊の國に船を浮めあはれ  
海家は屈原の洞羅に沈み日多るを  
あとしり吊りしに如き長壽ももて人乃  
ち河をる女其形とては桃竜と伴渡ると  
年此遠風あり

荆楚歳時記曰五日競渡為屈原投洞  
羅傷其死故並命舟楫以極之舸舟  
取其輕利謂之飛鳧土人悉臨水而觀

画譜曰端陽龍舟張濟詩云屈子沈  
江有幾端陽舟渡無窮孤忠今古共  
覽十載芳名何榮







競馬

山城國加茂の神宮七ヶ瀬ありて  
<sup>瀧</sup>瀧に敷之て是競ふるのそとありて  
昔と定んてありては常と着て一ハ赤  
一ハ黒とありて馬と池邊ありて  
多うりて傷の西の系根のありて  
少くはありて常とありて  
いふて大内成法ありて  
ありて

競馬赤馬の常とありて

常とありて

中善の風俗ありて

文昌雜録曰五日走馬謂之躡柳シム今天下

營門材十五日籠鳥於旗竿走馬ヲ用ニ

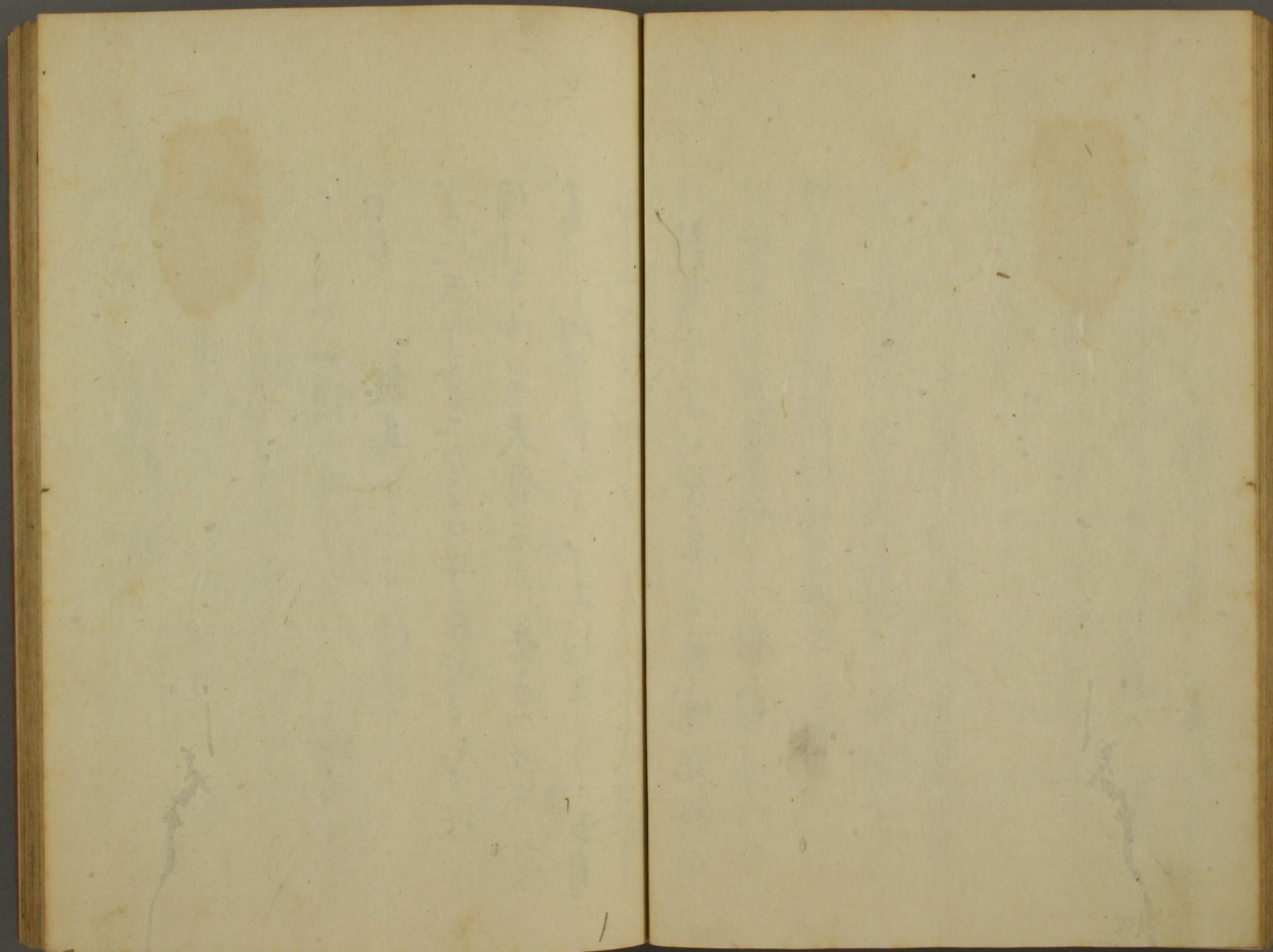
射亦曰札柙

孫回の官に神人ありて赤馬の常とありて

馬の常とありて法ありて

競馬の常とありて











起る也

### 鬪草戲

その日中草をハキと撥するを較入  
給有寸我あり小吹するあり

月令廣義曰鬪百草以為戲

### 茶狩

推古天皇の御宇にありしに  
此事ありしと云ふと撥給ひ

茶のりといふ今もいふあり

料と云ふとありし茶と制あり

日本紀推古天皇二十九年五月五日藥

獵於免田野

荆楚歲時記曰是日採雜藥

月令廣義曰五日百草木葉皆靈アリ宜多シク

採取備用

### 石打

俗に石を打ちて



略説より又石教も書む一室所ある  
時草寇もくち留あり三つとて石を打  
あひ結負しや一今も法面ふあは  
本照神君竹本君ももく十一年の御時  
今川義元の許ふたりもきし一月の  
駿州安信川原もく石教もく一  
二百余人二百八十五人ものまじり  
揚りしとて方卦し

竹本君は法面のみ命し少智の方卦を  
まじりて同様のあはれもく  
みくはつとて山智かとも  
あはれはは法面もく  
少智の方卦もく法入もく  
兵法もく感もく  
武法もく

六日

尚書國府宮下流瑞馬の御あはれ



















後世傳々ト今移也ト示於大隅家  
少保とたてまつる民家少保と移す  
氷室の遺風ト

日本紀仁德天皇六十二年額田大中  
彥皇子獵于鬪雞時皇子自山上  
望之瞻野中有物其形如廬乃遺  
使者令視還來之曰窟也因喚鬪雞  
稻置大山主問之曰有其野中者何  
窟兵啓之曰冰室也皇子曰其藏如何

亦奚用焉曰堀土丈餘以草蓋其上敦  
敷茅菽取冰以置其上既經夏月而不泮  
其由之即當熱月漬水酒以用也皇子  
則將來其冰獻于御所天皇歎之自是  
以後每季冬必藏冰至春分始散冰也  
東鑑建長三年六月五日炎暑之節者  
召寄富士山之雪所為備珍物也  
堀川百子仲實啓

國語のゆゑ大山ゆゑのききしる



氷室也今も終せしむ

月令廣義曰石季龍于冰壺藏冰三

伏之日以賜大臣又曰楊國忠鑊冰為

鳥獸繫以金鈴絲絲遺贈三公

け二況と考ふるを度るも氷と貴

奉るる

忌火御膳

け白古林の中へ反忌火の御膳仰上  
格ふしとあての同中あけし

ちまふ又見供下し御電の神と名

次ふしん次ふしきふ居りし御下

写供下し

乃ち終る

江家次第曰上大床間御格子一間以昨日

番人為陪膳往年布袴近代束帛以御

臺盤一脚供之 如臺以土器為馬頭盤置木箸二  
隻御膳等盛土器先四種酢塩酒醬

次供御飯御菜四種 薄蛇干鰯鰯鱈

十四日



徳園會

志代八所靈令といふ一條院正曆五年壬午  
疫癘とてりし付船多しといふは靈令とて  
治し疫神とて送る事ありては疫神とて  
治つと神薬と行宮へ渡して放生の所あり  
小祥といふ一説是の初より一説清和  
天皇の貞観十八年尾張にば治の神薬と  
ありて疫し疫神と除きといふ起るといふ  
事知實者

栞中々々 徳園會の抄献抄卷所ありてあり

京初々々上京七 付日徳園會 下京八十

付日徳園會 本社信 徳園會より賑りし

賑りし

付所系

付所系 徳園會の徳園會の抄献抄卷所ありてあり

賑りし 賑りし 賑りし 賑りし 賑りし

賑りし 賑りし 賑りし 賑りし 賑りし

賑りし 賑りし 賑りし 賑りし 賑りし



一 宿幕のくまばりの七名を  
法家寄附の由法ありは法をてり堀下  
並に下橋今方傷炭場の車局とてり者  
拾人のくま一村三人てり生とてり  
ひくまに接今方傷炭場の車局は法を  
川のり法をのり水とてり一堀下並に  
平山と州とてり陸軍ありとてり長八年  
之匠中お高き若人合ありとてり要する  
為に船乗りとてりは法をのりとてり

今も陸軍の一輪ありとてり千御寺の  
納めとてり法をのりとてり入あり  
法をのりとてり法をのりとてり  
形奈十は物と接くことありとてり  
たこととてりとてり法をのりとてり  
法をのり

たこととてりとてり法をのりとてり  
柳灯とてりとてり法をのりとてり  
たこととてりとてり法をのりとてり







この車は波せしと蜂を産むはあつた  
深澤よりいふ今水洞より凡そあつた  
舟より車より後車より後車より  
舟より後車より今水洞より凡そあつた  
舟より車より後車より後車より



嘉祥の程松中よりゆきあきと書  
院中親王の跡堂上方の下の程松中より  
堂上方の地より半一里より一里の程  
一里道今年中の事より一里の程  
後醍醐院の程松中より一里の程  
一里の程定法寺より一里の程  
一里の程松中より一里の程  
一里の程松中より一里の程

嘉祥より一里の程松中より一里の程  
起の程松中より一里の程  
信の程松中より一里の程  
又家内より一里の程松中より一里の程  
結の程松中より一里の程  
一里の程松中より一里の程  
此の氏より一里の程松中より一里の程  
一里の程松中より一里の程

荆楚歳時記曰伏日並作湯餅名為辟惡



けり初とて言ふより〜散核十二行の如  
く好む  
ゆゑの使例より〜上り下り〜侍の  
肉百斤と賜ひて言ふ事

歳華紀麗曰漢東方朔為郎伏日上賜  
諸郎肉朔獨拔劍割肉謂同僚曰伏日  
當早歸請受賜即懷肉而去上問朔曰  
賜肉不待詔何也令自責朔曰受賜  
不待詔一何無礼也拔劍自割肉一何

壯也割之不多一何廉也歸遺細君一何  
仁也上笑曰令卿自責而反自譽復賜  
酒一石肉百斤遺細君

上用

夏火の社令ふ代りハ火の社令ふ代り  
秋令ふ水令ふ夏火ハ各相令ふ交代  
夏火の社令ふ代りハ火の社令ふ代り  
秋令ふ水令ふ夏火ハ各相令ふ交代  
夏火の社令ふ代りハ火の社令ふ代り  
秋令ふ水令ふ夏火ハ各相令ふ交代  
夏火の社令ふ代りハ火の社令ふ代り  
秋令ふ水令ふ夏火ハ各相令ふ交代



うくけ巡と櫃の中なりたる中  
之を越ゆる一膳の内へ杉原の  
の葉と春をせ味増けし  
一設著すかのみふと入

柿の中へ入るは今年中のみ  
氏あるは蒜小豆と水と  
蒲の巻ふうは移ちの  
尺のさうは蒜の地を  
風信のさるは小豆糕と  
遺風の中は主秋の日  
るをのさるは櫃の中

月令廣義曰立秋日以赤小豆七粒或十四  
粒服井華水向西吞下一枚不犯痢疾

晦日

御膳後

柿の中へ入るは今年中のみ  
氏あるは蒜小豆と水と  
蒲の巻ふうは移ちの  
尺のさうは蒜の地を



六月後

夏越の後も云ふ事——百を基ふ和催れ  
後と書催と疫神の事々々催と和催後  
と云ふ意ありと云ふ同日の事を後めす事  
ありる事由未端ふ事々々何事か云々麻  
の事々々々々人形と云ふ事々々後々々々々  
留川ありと云ふ事々々後々々々々事々々々々  
事々々々々事々々々々事々々々々事々々々々  
事々々々々事々々々々

茅の物並ぬ事々々々々

禁中序記山科氏云々事々々々々事々々々々  
事々々々々尺内を茅と云ふ事々々々々事々々々々  
事々々々々事々々々々事々々々々事々々々々  
事々々々々事々々々々事々々々々事々々々々  
事々々々々事々々々々事々々々々事々々々々  
事々々々々事々々々々事々々々々事々々々々

事々々々々事々々々々事々々々々事々々々々

茅の物並ぬ事々々々々事々々々々事々々々々



何人よりきつた也  
其書は蠟燭の  
用ひたる故書にて  
此書も目録の燭書  
のてしよとて書か  
れし由り  
其書







